歴史探訪（いにしえの）

中川村の中世を歩く―。
大草城と舟山城の物語

中世の伊那谷では、天竜川に面した丘陵の先端部や、天竜川を望む山の尾根部に、城館がいくつも築かれました。見晴らしのよさが攻めにも防御にも好都合だったからです。景観に優れる中川村にも、8つの城跡が残っています。

ここでは中川村周辺の中世史に欠かせない大草城と舟山城を取り上げながら、村の歴史絵巻を紐解いてみましょう。

南北朝の争いのなか、宗良親王を守護した香坂氏の大草城

深沢川と、牛落の洞に挟まれた台地にその城はあります。大河原（現下伊那郡大鹿村）城主香坂高宗の拠点であり、香坂氏代々の居城であったとされます。

鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇が行った建武の新政に対し、武士たちの不満が募るなか、足利尊氏は天皇に反旗をひるがえします。再び武士を中心とした政権を樹立しようと、延元元（1336、南朝元号）年、京都に光明天皇を擁し（北朝）、新しい幕府を樹立しました。一方、後醍醐天皇は吉野に移り尊氏と対峙します。南北朝時代の幕開けです。

信濃では、北朝方の中心に小笠原定宗がいて、南朝方には国司の堀河氏や香坂氏がいました。小笠原氏はもともと尊氏の命で、北条家の生き残りの時行とこれを支えた諏訪氏と争い、信濃における勢力を増していった武士です。領内では、香坂氏が北条時行や諏訪氏の動向に影響されたためそのまま南朝方になり、天竜川を挟んで西側の片切氏は、小笠原氏の動向に左右されたため北朝方に属しました。

さて、後醍醐天皇と足利尊氏ら武家勢力の権力争いが続くなか、天皇の第八皇子である宗良親王は、延暦寺天台座主を退き戦いに加わります。親王は各地を転戦し、やがて興国4（1343）年に越中から伊那の大河原に入りました。

大河原は小渋川の奥深く、周りは山に囲まれた自然の要害で、北は諏訪、南は遠山・遠江へとつながる交通の要衝でもあります。さらに、天竜川の東部にあり宮方の勢力が強かったことも好条件でした。宗良親王は、30年の余ここを拠点に南朝方勢力拡大に努めます。

親王を陰に日向に支えたのが、大草郷（大草・大河原・鹿塩）を本拠にしていた大河原城主香坂高宗でした。そして、香坂氏の前線基地だったのが大草城です。親王の奮戦むなしく、信州での宮方は力を弱めますが、香坂高宗はひとり親王を守り、忠節を尽くしました。親王が「信州大王」「信濃宮」「大草宮」、あるいは「幸坂宮」などと呼ばれるのも、親王と大草郷、香坂氏との関係の深さを示すものです。

後に戦国の世になると、香坂氏は徳川家康に帰属し、子孫はやがて帰農しました。城は天正10（1582）年の織田軍伊那侵攻以降、廃されたといわれています。

大草城跡は宗良親王に仕えた香坂高宗の居城跡。現在は桜の名所として知られる

東側から望む舟山城跡。舟を山の上に置いたように見えることからこの名がある

伊那谷の源氏の流れを汲む片切氏が館を構えた舟山城

舟山城は中川村と松川町の境、天竜川を眼下に望み、田島地区や葛島地区を一望することができる段丘上にあります。舟を山上に伏せて置いたような地形から、古来この名で呼ばれています。

この城の主である片切氏は、南信濃源氏の祖・源為公の第五子、源為基を祖とします。為基から片切氏、大島氏、名子氏、前澤氏、赤須氏、飯島氏、岩間氏が別れ、それぞれ天竜川流域の小河川で区切られた地域に住みました。

為基の孫・片切景重は、保元の乱、平治の乱と続けて参戦した勇猛な武将でしたが、源氏の敗退で命を落とし、その領地も平氏に没収されてしまいます。その後、源頼朝が幕府を開くと、景重の子・為安は、頼朝から景重の忠節を褒められ、旧領も安堵されることになりました。ここに片切一族は20数年ぶりに在地での生活が保障されたのです。

はじめ片切氏の本拠は、古代東山道の賢（堅）錐駅があったとされる中村の地（現・中央地区）でしたが、後にこの舟山城に移りました。城には出丸と本丸、二の丸があり、中川村側にある出丸が南北朝時代に築城されたものとされます。

先にもふれたように、鎌倉幕府が滅んだ後、信濃では北条時行や諏訪氏らと小笠原定宗とが争いました。片切氏や一族の飯島氏らは、この争いにおいて小笠原方となり、後には北朝側として南朝と戦ったと思われますが、具体的な資料はなくはっきりしません。

時は下り戦国の世、武田軍が伊那を平定すると、片切氏も武田軍に帰属しました。松川町側にある本丸や二の丸は、戦国時代に拡張された部分といわれます。こうして舟山城は、中世においてかなりの勢力を示し、片切宗家の地位を保っていましたが、やはり天正10（1582）年、織田軍の侵攻で災禍に遭い、以後廃城となりました。